

## 7. 水産部門技術士の現状と課題

久下 善生(東光コンサルタンツ)

技術士(水産・建設・総合技術監理部門)

### 1. 技術士と水産部門技術士の現状

2009年3月末現在の技術士数は延べ78,439名である。60年の歴史を持つ技術士制度のこの人数は、米国PEの40万人、英国CEの19万人に比べて著しく少なく、2005年国勢調査の技術者数229万人の3%にすぎない。JABEE修了者は10万人近くとなったが、2009年度第二次試験受験者は160名にとどまっている。

水産部門技術士数は495名で、この3月に念願の500名を突破できそうだが、全技術士の0.6%である。1994年、水産庁長官が都道府県等に対して①水産部門技術士の活用、②水産部門技術士の養成を通達し、さらに近年は漁港漁場整備事業を中心に活用が着実に進んでいるが、一方では技術士資格を必須要件とすることが競争を阻害するかのような意見もある。今後、専門的応用能力と技術者倫理を兼備していると認定された技術士の活用が拡大することは間違いないが、そのためには水産界における技術士の育成が急務となっている。

### 2. 水産部門技術士の倫理関係活動

近年、技術者の倫理問題が吹き荒れている。水産、食品業界も例外ではない。そこで、日本技術士会の農業・水産・生物工学部会のほか2グループの5団体が2008年1月、緊急共同アピールを発信した。その後5団体は継続して3度のセミナーを開催し、2010年には日本技術士会としてCPD教材「食の安全・安心について」を発行すべく、執筆が進んでいる。

水産部会単独でも2009年11月、技術者倫理に焦点をあてた研究発表会を開催した。その他、部会員の多くが職場、業務を通じて技術者倫理の発揚に努めている。

### 3. 水産分野における技術者倫理の啓発

食の安全・安心や環境問題などの個別課題への対応は別にして、水産分野において「技術者倫理」としての問題提起は2000年の東水大公開シンポジウム「科学を学ぶものの倫理」が端緒といえるであろう。これが2001年に書籍化(渡辺・中村共編)された後、2006年に「農林水産業の技術者倫理」(祖田・太田編著)が刊行されるまで5年を要した。

以降、水産系JABEE認定校においては技術者倫理が日常的に取り扱われる重要課題となったことは承知しているが、非認定校の実情については知識がない。授業で倫理が身につくかと揶揄されても、観点や事例を学ぶことは将来の自律的な技術者の育成に役立つことであろう。

実業界での倫理啓発は、技術士の努力のほか、心ある企業の社内教育に頼っている。

日本水産学会が本シンポジウムを開催することが、振り返って画期となることを願う。

### 4. 倫理を伴う技術者の育成増加を目指して

「科学技術者の倫理」(Harrisら、日本技術士会訳編)では、技術者の責任を「最低限実行」、「適切な配慮」、「立派な仕事」と段階的に述べ、技術者は美徳を必要とするかという問いに「美徳を含むことがありうる」と述べている。そこには議論の余地があるかもしれないが、技術士資格を取得するメリットは何かという問いよりも議論の価値は高いと感じる。技術者倫理を備えた技術者が技術士だけとは限らないが、それでも500人では少なすぎる。個人資格のメリットを追求するだけでなく、水産部門技術士の陣容を整え、水産業の振興の一助となれるよう、今後とも努力していきたいと考える。